

集団欲は、重要な、きびしい本能的欲求である

当 HP の記事「『私の家族～特別養子縁組・親と子の15年～』を見て（HP「雑学 BN」のマスコミ等コメント関係（VI）、2010.05.11.：参照）」を目にしてくれた元学生から、次のようなメール（抜粋）が届いた。

「私も番組を見ました。養母は先生が授業で話してくれた「オ母サン」そのもので、子どもに真っ正面から向き合うあの養母には私も敬服するばかりです。本当に、世の中には、凄い人ってたくさんいますね。

あんなに素敵な「オ母サン」に恵まれているのに、子どもが産みのお母さんに一度でいいから会いたいと思うは『人として自然な感情』ということは、どういうことですか？教えてください。」と、厳しい指摘を受けた。

「人として自然な感情」と記した自分なりの根拠は、次のようなことからであった。

戦後の大脳生理学分野の先駆者である東京大学元教授の時実利彦先生は、その著書「脳と人間（雷鳥社、1968.）」の中で、「孤独とは、集団生活から隔離された状態の時に感ずる心であって、私達はこのとき限りない心の不安定感を覚える。そして、集団欲が十分になえられている時、この上ない心の安定と親密の心を体得する。性欲や食欲よりも、集団欲はうんと重要な、もったきびしい本能的欲求である。」と記している。

つまり、養子の子どもたちが自己の存在の意味（スピリチュアルな側面）考える時、また、自己肯定感（自分はこの世に存在し、自分は生きていていいんだと感じること）を感じるには、やはりまず自分のルーツ（どの集団に属したのか）が解らないと、他の人には説明し難い不安感を感じるのではないだろうか。

つい最近、ある総合雑誌の「国際養子縁組み」の記事の中で、5歳の時に国際養子縁組で米国に渡り、恵まれた養親の元で成長した51歳の方の告白を目にした。

その人は自分の人生の歩みという心のジグソーパズルの中で1～5歳の空白のピースがあり、そのピースを求めて何度も来日し、ようやく1～5歳までの自分の生い立ちの場所と様子、そして母親がどういう人だったかを知ることができ、ようやく心のジグソーパズルが完成した充実感を得たという。

当 HP でしばしば取り上げている「人は心の居場所を求める」のも、本能である集団欲に起因する心の安定と親密の心を体得したいと思うからこそであると思っている。